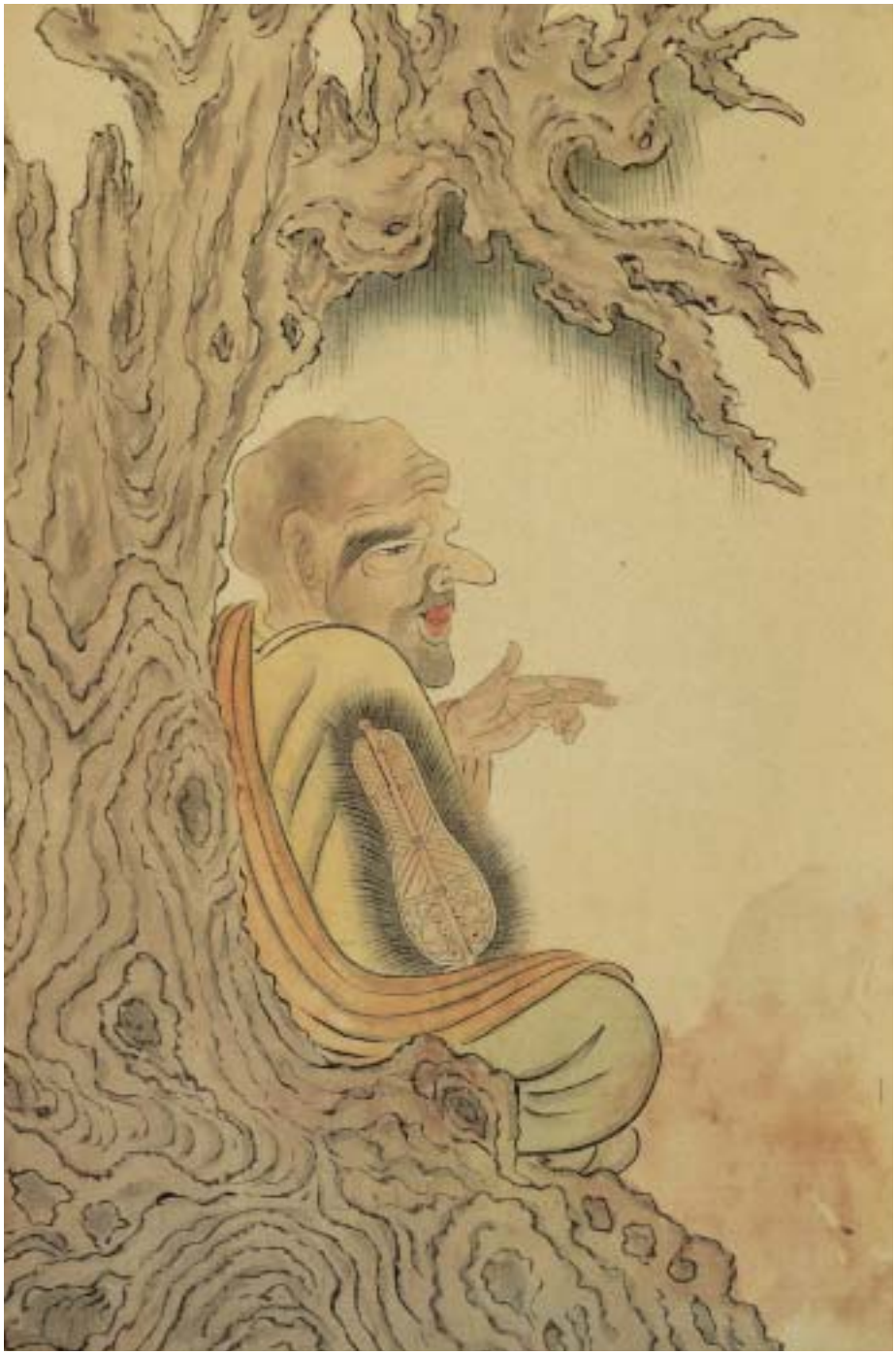
常照

53
2005

佛教大学図書館報

目次

・図書館の現状……1
・ＩＬＬから見る図書館情報ネットワークの展望……3
・平成15年度諸統計……5
・新収資料紹介　御伽草子『羅生門』……(1)



第十六注荼半託迦尊者、侍拈揺而書空
腋挿搜扇、一握、上画ヨ月、
古樹岩垂、指頻、屈伸、詰問、大士、為我為人搜扇
一柄、匪、揺風生、無邊、熱悩、投拂頓清、

●佛教大学図書館所蔵『十六羅漢圖賛輯録』より

図書館の現状

瀬澤且博

大学図書館の状況

現在、大学を巡る環境が刻々と変化をしています。平成16年4月からの国立大学の独立法人化、法科大学院等の専門大学院の立上げ、18歳人口の減少による2007年度問題、研究分野・教育分野における第三者評価の導入など、今後の大学運営において大学独自の決断と努力が迫られています。

図書館業務の変容

ところで図書館では、出版形態の変化や図書の電子化・情報の多様化（インターネットの普及）などにより、業務も急速に変化してきています。図書館の役割はかわらないとしても、情報管理、情報サービスともに高度で多様になってきております。

情報化への対応としては、端末機器を効率的に配置し、パソコンによる二次情報（目録や索引等）を検索したり、インターネットで外部情報検索できる環境を整備し、学習や研究のための快適な空間を提供しています。

より具体的には、近年図書館情報化の急速な進展のなかで、国立情報学研究所を中核としたNACSIS－CAT共同分担目録作業によるデータベース構築はいまや世界に誇るものとなり、わが国だけにとどまらず海外の大学や研究機関にもネットワークの輪を広げつつあります。本学図書館で作成した書誌データを登録すれば、そのデータを他の参加機関が利

用することができ、他機関がすでに作成したデータがあれば本学はそれを利用できます。相互に利用し、全国的総合目録データベースの構築を共同で行なうためには、目録データの品質管理が重要になってきます。さらに、データベースの充実にともない、インターネットを介してオンラインでの相互利用も活発化してきており、ここ数年飛躍的な伸びをみせています。

専　門　員

このような飛躍的な充実は、図書館員全員の努力の賜物ですが、とりわけ「専門員」と称するプロフェッショナルのライブラリアンの活躍を抜きに語ることができません。ちなみに現在、専門員は３名おり、いずれも京都大学図書館での勤務経験を最大限に活かして業務の改革･遂行に努めています。それぞれの専門分野（収書･参考調査を中心とする学術情報サービス、古典籍資料組織を中心とする学術情報管理、学術情報システム）を担当しつつ、全体の運営にも積極的に提言し、かつまた他の課員の指導･養成にも当たるなど文字通り図書館運営の中枢を担っています。将来的にはさらに２名の増員を図る予定ですが、その中には、現専門員の指導による自前養成の課員も含まれるかもしれません。「図書館職員」つまり人材の育成・養成です。いずれにせよ、上述のような図書館業務の大変革が極めて高度の専門的人材を要請していることに間違いはありません。本学図書館は他の私立大学にいくらか先駆けてその端緒を開いたといえましょう。

おわりに

図書館を構成する三要素「建物」、「資料」、「図書館員」のうち資料と建物は、まだまだ、大学図書館の使命を達成するためには不十分な部分があります。今後、限られた予算の範囲内で学生や教員のニーズにあった事業サービスの充実・拡充を計画的に実施し、学生には「学習と情報収集のために行かずにいられなくなるような楽しく、かつ知的な活気に満ちた図書館」、教員には「豊富かつ体系的な蔵書構築と、情報社会を積極的に活用しうる機能的な研究図書館」と言われるような図書館を確立したいと思っています。

（図書課長･せざわ かつひろ）

＜輪蔵だより＞

当館は平成17年3月に図書館コンピュータシステムの大規模なリプレイスを行います。そのため、例年より多くの休館日数を要します。

同時期に４階の参考調査窓口を１階へ移設し、サービスカウンターの集中を行います。

しばらくご迷惑をおかけいたしますが、よりよいサービスを目指し、準備をすすめておりますので、みなさまのご協力をお願いいたします。

ILLから見る図書館情報ネットワークの展望

飯野　勝則

ILLすなわちInterlibrary Loan（図書館相互貸借）の歴史は古く、20世紀初頭の近代ヨーロッパの図書館においても、既にその意義は十分に理解され、広範囲における統一目録の作成とともに、図書館に欠かせぬ一要素としての足場を築いてきた。図書館の歴史は「より多くの知識を提供する」図書館を目指してきた歴史であるといえるが、その流れの中で、図書館の先人たちは図書館自身の物理的な巨大化を目指しつつ、その限界を知り、現実的な妥協点を求めた。その帰結として生まれた、図書館におけるこのような有機的な結合は、広範囲における学術情報の連接に他ならず、現代的な語彙で言う学術情報ネットワークの先駆けであったといって過言ではない。以来、近代から現代へと世紀単位での時が流れたが、現代に生きる我々も、このILLの概念を一つの要素として、より広い範囲での学術情報ネットワークの構築を目指している。先人たちが、いささかプリミティヴであっても、広範囲における学術情報ネットワークを構築し、統一的な意味での「標準的」図書館サービスを目指したことは、我々にとっても大きな啓示に値するに違いない。では、情報化社会として成熟しつつある現代において、図書館の一体化、標準化を目指すILLはどのような展望を持ちえるのだろうか。

日本におけるILLの中心となるネットワークシステムといえば、それは寸分の疑いなく国立情報学研究所が主体となって運営するNacsis（National Center for Science Information Systems)-ILLである。NIIホームページ上の2005年1月のデータによれば、実に1,000組織以上が参加していることになっているが、これはNacsis-ILLという存在が、日本各地の大学図書館等で行われているILL業務の形態に対し、影響を与えるに十分な組織数であると見て間違いない。従ってNacsis- ILLの状況は、現在の典型的図書館像を映し出す鏡の一つであると認識できる。

昨今、このNacsis-ILLには新しい流れが生じ始めた。それは、国立、私立の設立母体を問わず標準化され、整備されたILL料金の相殺システムの稼働である。言葉の響きを聞いただけでは無味乾燥なイメージをぬぐえない相殺システムであるが、実際には、参加図書館に対し、ILL運営の効率化を導き、より多くの利用を促進し、さらには相殺を軸にすることで、意識的、心理的な一体化をも推し進めるという、極めて豊潤な結果をもたらした。このような潮流の行き先には、図書館の全国規模での一体化が存在する。それは逆説的に言えば、全ての図書館が一体化したサービスのもと「分館」化していくことに他ならない。今の図書館はそこに関わる人々の色々な思惑があるにせよ、そのような一定の貫流の中にある。これは期待であり、そして確信であるのだが、ILLが参加各館の均一な業務と均質なサービス、そして均等な処理速度を通して図書館を普遍化させるとき、図書館は新たな世界に踏み込むにちがいない。

その他、Nacsis - ILLに代表されるような、国家的統一機構としてのILLシステムを求める流れは、決して日本だけのものではないことも、図書館の将来を占う上で、重要なファクターとなりうる。例えば、GIF（Global ILL Framework）プロジェクトを通し、Nacsis-ILLと連携を強めつつある、米国OCLC（Online Computer Library Center, Inc）や韓国Keris （Korea Education and Research Information Service）- ILL、そしてNacsis - ILLと連携関係はないものの、中国において現在全国ネットワークを形成しつつあるCALIS中国高等教育文献保障系統（China Academic Library & Information System）等は、その代表例である。その他、2005年1月16日には、台湾において、旧来のILLシステムを全面的にリニューアルする形で、NDDS全國文獻傳遞服務系統（Nationwide Document Delivery Service）という新ILLシステムが成立したが、これも上記の流れに沿ったものとみて間違いない。

このように目録システムの多言語化が進み、異なる国家間での資源共有が可能になったことで、「智の集積体」である図書館が、それぞれの国家レベルにおいて、統一的かつ標準的に形成されつつある規格の下、ILL業務を遂行していける状態になったことは、大きな価値をもつ。それは図書館がその初期段階から無意識に訴求し、自らの巨大化を導いてきた「より多くの知識を提供できる」存在としての究極的目標が、その入口段階において、象徴的に実現したことを示しているからである。言葉を換えれば、実態存在としての無限規模の図書館、その代替としてのILLという概念が、よりはっきりとした形で具現化していく、最初のステップに他ならないからだとも言えるのだが、いずれにせよ、このような国内、国外を問わないILLの国家レベルでの統一化は、明らかに過去から連綿として受け継がれてきた「より多くの知識を提供する」図書館を目指すという理想が、世界の多くの国々で普遍化した存在であることの何よりの実証となるであろう。従って、日本におけるNacsis - ILLに依拠した標準化の流れは頗る妥当であり、国家内の統一機構としての、Nacsis - ILLの存在感が増してきたのも、また必然であるに違いない。当然、佛教大学図書館としても、この流れに沿って自らの道筋を決定していく必要がある。

どんな事象であっても、国内的な統一の次には国際的な連合が確かに存在する。実のところ、私はグロバールスタンダードという言葉や、統一という語感にはネガティブな印象をぬぐえないのだが、近頃、図書館に関してだけは肯定的な捉え方ができるようになった。

ここ数年で大容量のデータのやり取りが進み、資料の電子化も加速度的に進みつつある。著作権等、デジタル化したデータへの問題は山積しているが、社会の絶えざる進歩の中で、やがてはこれらを解決しうる方策が生み出されてくるに違いない。そのとき、より高速化し、巨大化した情報世界において、ILLがどのような表情をみせる学術情報ネットワークの構成物となるのか、個人的には興味がつきない。ファレロンのデメトリオスの進言を受け、「世界のあらゆる智」を集めるべく、プトレマイオス一世の手で築かれた古代アレキサンドリア図書館。以来2300年、あるいはその理想は、高度情報化社会の中、ようやく実現への足がかりが見えてきたといえるのではないだろうか。

（図書館専門員・いいの　かつのり）

平成15年度　諸統計

蔵書数（平成15年5月1日現在）

	内国書	外国書	合　計
図書	632,849冊	159,055冊	791,904冊
雑誌	5,812種	1,972種	7,784種

注：図書は、大学全体の所蔵数である。

資料区分別受入冊数

資料区分		和書	中国書	洋書	その他	計
図書（単行本）		12,931	4,230	1,509	0	18,670
逐次刊行物		2,151	111	390	0	2,652
マイクロ資料・その他	マイクロ資料	700	2	232	0	934
	点字資料	1	0	0	0	1
	地図資料	20	13	0	0	33
	楽譜資料	7	0	4	0	11
	録音資料	22	24	3	0	49
	映像資料	401	81	13	0	495
	静止画像	0	0	14	0	14
	機械可読ファイル	112	46	3	0	161
	複製資料	42	3	0	0	45
	その他	0	0	0	11	11
	小計	1,305	169	269	11	1,754
合計		16,387	4,510	2,168	11	23,076

注：図書（単行本）は、大学資産として受け入れられた全冊数であり、通常整理と簡易整理（学術研究助成分など）に分けられる。逐次刊行物は、製本雑誌の登録数である。

主題別整理冊数（単行本）

主題別	和書	中国書	洋書	計
0 類総記	799	339	25	1,163
1 類哲学	1,354	684	455	2,493
(14) 心理学	(214)	(0)	(34)	(248)
(18) 仏教	(483)	(94)	(197)	(774)
2 類歴史	1,571	1,078	80	2,729
(21) 日本史	(1,071)	(1)	(29)	(1,101)
(22) 東洋史	(206)	(893)	(17)	(1,116)
3 類社会科学	3,550	169	316	4,035
(36) 社会学	(645)	(15)	(107)	(767)
(369) 社会福祉	(446)	(0)	(22)	(468)
(37) 教育	(1,013)	(11)	(70)	(1,094)
4 類自然科学	472	9	38	519
(49) 医学	(305)	(3)	(22)	(330)
5 類技術	274	4	11	289
6 類産業	182	18	12	212
7 類芸術	552	82	22	656
8 類言語	214	114	45	373
(81) 日本語	(107)	(1)	(0)	(108)
(82) 中国語	(67)	(112)	(12)	(191)
(83) 英語	(18)	(0)	(10)	(28)
9 類文学	1,154	424	225	1,803
(91) 日本文学	(807)	(1)	(2)	(810)
(92) 中国文学	(103)	(422)	(3)	(528)
(93) 英米文学	(146)	(0)	(154)	(300)
合計	10,122	2,921	1,229	14,272

注：2003年度に大学で受入登録された単行書の通常整理（データ入力済）分である。（　）内は内数である。

主題別貸出冊数

利用者別 / 主題区分	通学				通信				教職員		その他		合計	
	学部		大学院		学部		大学院							
	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書
0類 総記	137	0	1	0	52	0	0	0	12	0	10	1	212	1
1類 哲学	7,728	75	2,645	145	3,010	12	595	10	565	42	1,014	65	15,557	349
2類 歴史	5,049	10	1,485	1	1,184	0	150	6	314	3	304	5	8,486	25
3類 社会科学	15,948	6	2,164	29	7,951	8	325	1	501	58	506	46	27,395	148
4類 自然科学	1,568	0	321	9	721	0	9	0	43	5	76	0	2,738	14
5類 技術	985	0	99	0	120	0	8	0	38	0	36	0	1,286	0
6類 産業	559	0	118	0	81	0	4	0	34	0	14	4	810	4
7類 芸術	1,969	0	183	0	350	1	43	0	77	0	118	0	2,740	1
8類 言語	4,323	11	664	8	1,162	4	156	10	349	4	418	21	7,072	58
9類 文学	4,652	14	719	34	1,672	28	275	29	271	15	263	41	7,852	161
分類なし	3	2	7	2	0	0	0	0	15	3	24	1	49	8
計	42,921	118	8,406	228	16,303	53	1,565	56	2,219	130	2,783	184	74,197	769
中国書	16		56		24		0		26		42		164	
国書	1		11		10		3		0		0		25	
佛書	0		0		0		0		53		0		53	
宗書	6		13		0		0		19		0		38	
文庫	3		50		0		0		56		0		109	
その他	6		7		8		4		6		5		36	
合計	43,071		8,771		16,398		1,628		2,509		3,014		75,391	

注：利用者別の「その他」欄には、研究生・研究員・卒業生・事務用利用等を含む。

◆新収資料紹介

御伽草子『羅生門』

古川　千佳

『羅生門』絵巻は平安時代の武将・源頼光（九四八～一〇二一）の鬼退治武勇伝に源氏伝来の名刀伝説を織り交ぜたものがたりで、舞台は平安京、成立は室町時代中期頃といわれています。

このものがたりには羅城門のあった現在の千本九条あたりはもちろんですが、多田、摂津国、丹波国・大江山、堀川通り一条戻橋、正親町の橋詰、二条大宮、八条坊門、男山、大和国・宇陀の郡、二条の御所、河内国・高安の里、唐土、長岡、横川等の地名や場所がみえます。たびたび登場する源頼光は一条戻橋近く、占博士（陰陽師）・安倍晴明の邸に間近く居を構えていたとのこと、本学近くの十二坊・上品蓮台寺には石碑「源朝臣頼光塚」が、ゆかりの蜘蛛塚としてひっそりと存在しております。

羅生門（正しくは羅城門）とは、羅城すなわち城外郭に設置された門で、中央を東西（左京・右京）に分かつ朱雀大路南端の京極に開かれた平安京の正門ともいうべきものでした。ものがたりの題名となっているこの平安京・羅城門（羅生門）は弘仁七（八一六）年に暴風雨で倒壊、まもなく再建されましたが、天元三（九八〇）年にはまたしても嵐に倒れてしまいました。それからは再建されることなく荒果てるままになってしまいました。

荒廃にまかせた羅城門には次第に人も近づかなくなり、屍骸の捨て場と化し、楼上には鬼が棲みつくようになったという説話は御伽草子『羅生門』だけではなく、多くの作品のなかに取り込まれています。

また、羅城門の楼閣上には平安時代初期に唐から伝えられた兜跋毘沙門天が王城鎮護を願って祀られたというのですが、現在、東寺にまします重要文化財の木像がそれであるといわれています。

平安京造営時の大内裏は現在の御所の位置ではなく南端が二条通り、羅城門から大内裏へと洛中を貫くメインストリート朱雀大路はおおよそ現在の千本通りにあたります。

羅城門は現在その姿をみることはできませんが、本学から千本通りを南へ下った九条大路北側に「羅城門遺址」の石碑が建てられており、「唐橋羅城門町」という地名にその名残をとどめています。

【関連作品】

『今昔物語集』、『平家物語』、『太平記』、『酒呑童子』、謡曲『羅生門』、『大江山』、『土蜘蛛』、小説『羅生門』、映画『羅生門』など

【ものがたりのあらすじ】

京の都で貴賤をとわず見目麗しい女性が次々にうせること百人を超すという事態に、原因を陰陽師に占わせると丹波国・大江山の鬼神の仕業という。

勅命をうけた源頼光がこの鬼神を退治したものの、酒宴の席にて大江山で討ちもらした眷属の鬼がこんどは都の羅城門に棲み、人々

の往来を妨げているという噂をきき、ほっておけなくなった頼光・四天王のひとり渡辺綱の願いにより、頼光は太刀・膝丸を預けて鬼神退治に向かわせる。

綱は羅城門にて鬼と戦い、あわや討たれるかというところを鬼の右手首を切り落とし、持ち帰る。こののち膝丸の銘は鬼切と改められた。

その後は羅城門で鬼を見かけるという噂もなくなり、往来もたやすくなったが、頼光は病に冒され、医師の治療や加持祈祷をもってしても治る気配がない。人々は鬼神の祟りと噂するが、ある者が大和国・宇陀の森に棲む鬼神を退治すれば眷属絶えて祟りも鎮まるはずという。

これを聞いた頼光は綱をして、この度は家宝の名刀・髭切を預けて立ち向かわせる。綱は女房の姿に変装して宇陀の森へと向かう。鬼神はなかなか現れず、二十歳ばかりの女房に遭遇し、女房の家での宿泊ならびに夜明けてのちの出立を勧められる。

綱はこの女房こそが鬼神であるとひそかに身構える。女房の家に案内され、気を許すかに見えたそのとき鬼神は姿をあらわすが、構えていた綱はすこしもあわてず鬼の手首を切り落として持ち帰ったところ、やがて頼光の病も癒えることとなる。手首を落としただけなので油断は出来ず、この後を占わせるに七日間の物忌みを勧められる。物忌み六日目に河内国・高安に住む頼光の母に姿を変えた鬼神が訪ねてくる。物忌み満了予定の翌日に会う旨を伝えるが、いますぐ会いたいと泣き叫ぶ母（実は鬼神）に屈し、扉を開けてしまい、ついには唐櫃に封じた鬼の手首まで見せてしまう。鬼神は自分の手首であると取り戻すが、綱、頼光に再度討ち取られる。

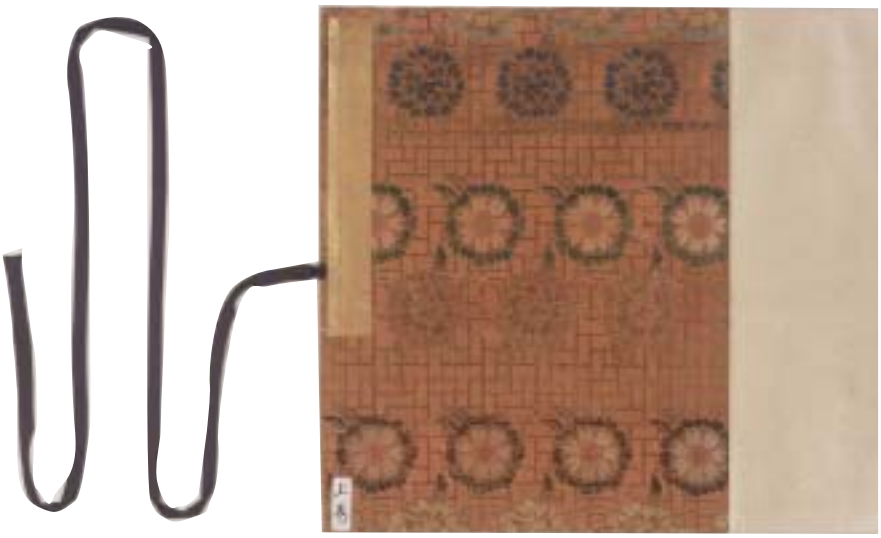
（図書館専門員・ふるかわ　ちか）

【書　誌】

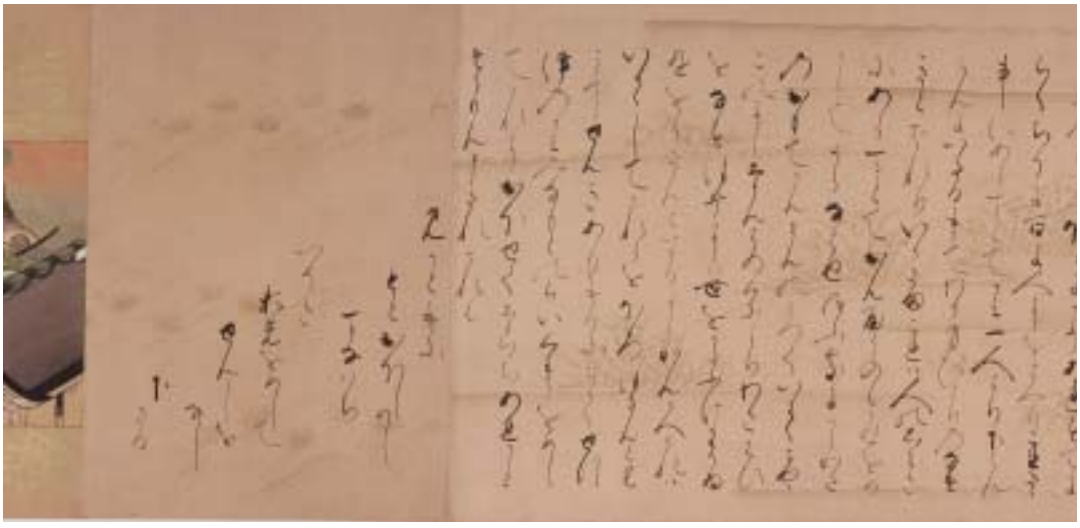
巻子仕立ての本体には内題外題ともになく、標題は箱蓋題によるものである。丁子茶色地に金糸を使った桜花織模様のある布表紙に濃紫の平紐を巻き、見返しには布目の金箔を置く。厚手鳥子紙の天地に金砂子・切箔を散らし、金彩下絵を施した本紙は裏地にも雲母（きら）を引いた豪華な絵巻である。本紙（詞書部分）は狭い部分で幅二二・八、広い部分では五〇センチをこえる。

納められた箱の蓋には「ろ第四拾八號」との貼紙付番がなされている。

標　題：羅生門
箱蓋題：羅生門
製　作：江戸時代・寛文ごろか
形　態：巻子
数　量：一軸
巻　紐：濃紫平紐
題　簽：金紙
表　紙：丁子茶色地に金糸織文様布表紙
見　返：表地折返しに金箔置紙
本　紙：金彩草花下絵鳥子紙に極彩色絵および墨書詞書
裏　地：雲母引
紙　高：約三二・八cm
軸　高：約三五・〇cm
軸　先：象牙
詞　書：漢字交じり平仮名文（一箇所振仮名付、一部濁点有）



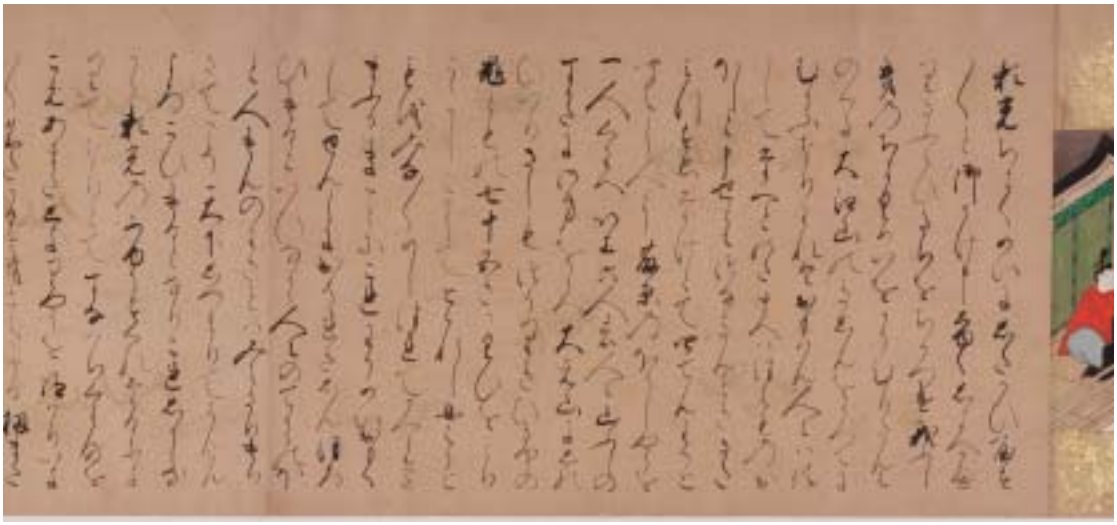
羅生門　上巻

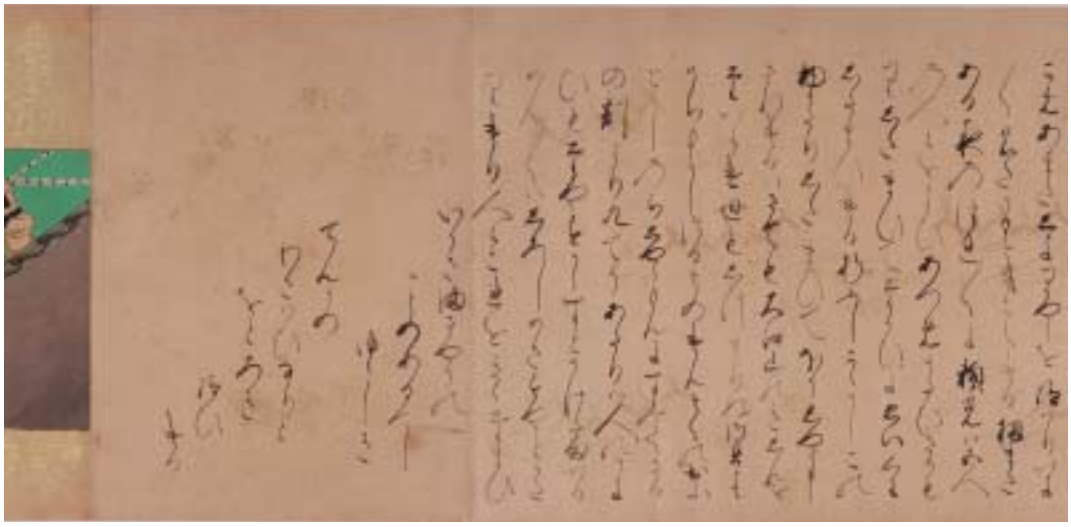


詞書釈文

そも〳〵にんわう五十六代のみかとせいわ天わうの御まこた、のまんちうと申はちから世に聞えきりやうたくましくしてふようの聞え有ければこれ日本ふしのすい一なりとてはしめてけんしのしやうを給はりくに〳〵のぢらんをしつめ給ふかその御子津のかみよりみつあとをつきはんしやうしたまふ時にあたつて都にふしきなる事共あり大臣公卿の御むすめ土民百姓のむすめをきらはす見めかたちのいつくしきはいつくともなくうせけるとてうれへにしつむものおほかりけりはしめひとりふたりのほとはわりなく人にそゝなはされけるにやあるひはおやのいさめもうとましくかくれうせぬとおもひしかこゝにもみえすかしこにもうせぬといふほとにこそあれすてにらくちうに百よ人にをよへりこれたゝ事にあらすとてかみ一人より下はんみんにいたるまてわか身ひとりのなけきとなれりいかさまこれは人のしわさにあらすとておんやうのはかせをめしてうらなはせ給ふ處にうらかたのおもてかんもんのもつていわくみやこのにしたんはのくによりわさはひをなすつゐには世をかたふけわうゐををかさんとするよしかんかへけれはいかゝしてかれらをほろほさんとくきやうせんきありけるにとかくせつ津のかみみなもとのらいくわうをめしてかれにおほせてたいちあれかしとそうもん申されけれは

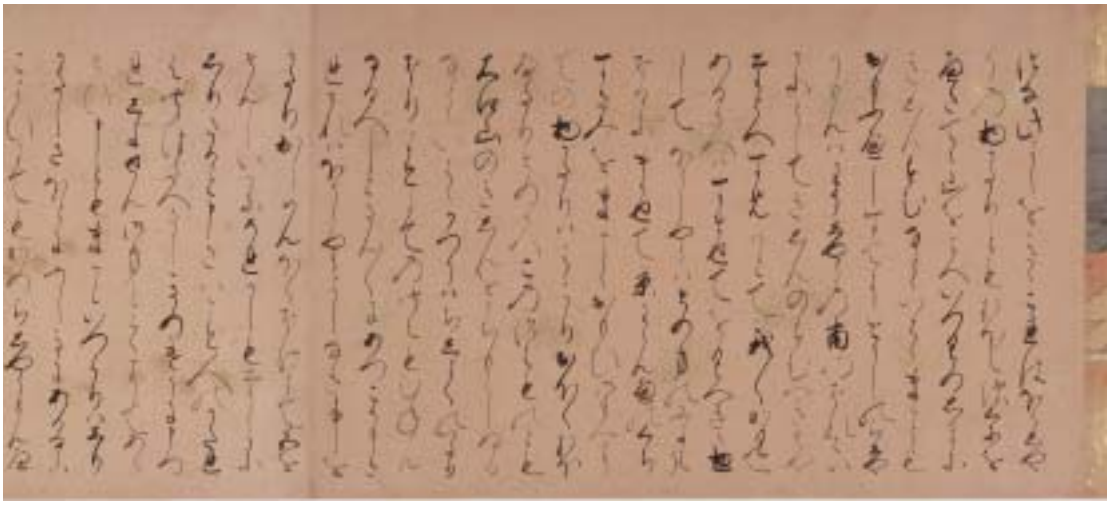
みかとけに
もとおほしめし
すなはち
いそき
頼光をめして
せんしを
なし
下さる

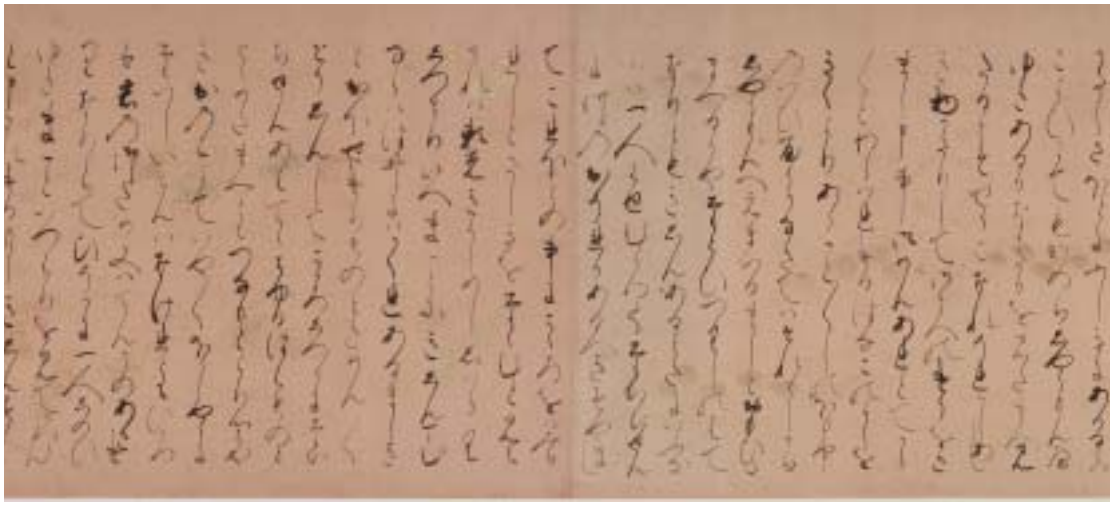




頼光ちよくめいにしたかひやす
〳〵と御うけ申しゆくしよへかへ
りさふらひたちをちかつけ我ふし
きのちよくめいをかうむりたんは
のくに大江山のきしんをうつてに
むかふなりわれとおもはん人々は供
してたへとのたまへはつはものお
ほしと申せともつなきんときさた
みつすゑたけとて四天わうと
聞えし人に藤原のほうしやうを
一人くわへ以上六人の人々山ふしの
すかたに御身をかへ大え山にしの
ひいりさしもつうりきひきやうの
鬼ともの七十五きかくひをとり
こゝかしこにてとられし女はうと
もをみな〳〵めしつれてかへらせた
まふかまことにこれわうめいおもく
してせんしにおそれきしんほろ
ひけるといひなから人々のてからのほ
と人けんのわさとはみえさりけり
さてこそ天下しつまりてはんみん
よろこひけるとなりこれしかしな
から頼光のふゆうすくれたるによ
りてなりとてすなはちくわんゐを
こえあまたしよりやうを給はりいよ

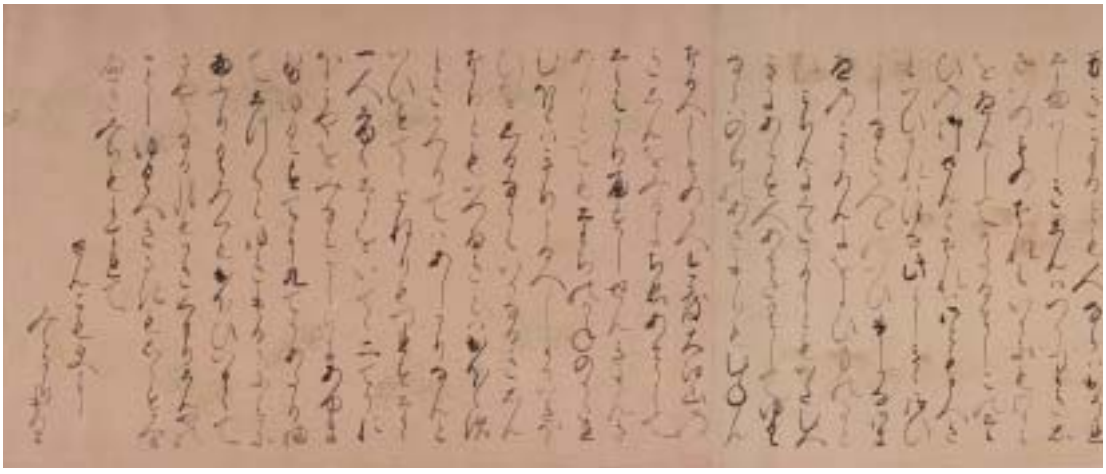
〳〵名たかくきこえける扨また
ある夜のつれ〳〵に頼光は五人
の人々をよひあつめうたひさかも
りしたまひてたかひにえいくわ
したまひける折ふしこゝかしこの
物かたりしたまひてほうしやう申
さりけるはさても大江山のきしんを
たいらけ世もしつまりぬされとも
うちもらしつるそのけんそくのおに
とうしのらしやうもんにすみてさる
の刻より九てうあたりは人のかよ
ひもたやすからすとうけたまはる
めん〳〵はしろしめさすやとかた
りけり人々これをきゝたまひ
いかさまさやうの
ことのあるへし
ゆゝしき
てんかの
わさはひなりと
をとろき
給ひ
ける





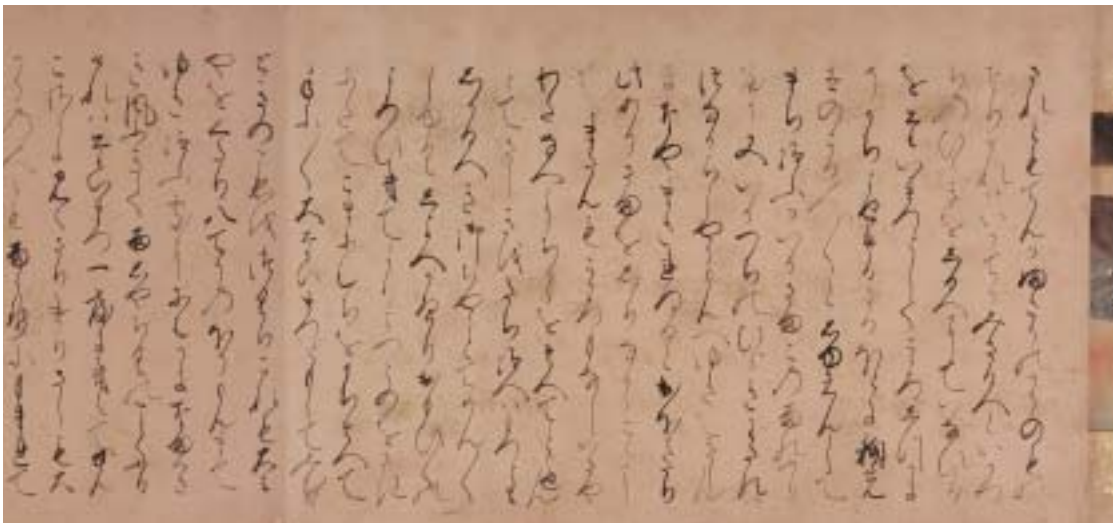
つな此よしをきゝこれはほうしや
うの物かたりともおほえすくにを
へたてゝ山をこへいつくのしまに
きしんすむなとゝいはゝまことゝも
おもふへしすてにとうしのらしや
うもんはわうしやうの南門なれはい
かにとしてきしんのすむへきそや
たとへすめはとて我〳〵かくて
あるうへはすませてをくへきか惣
してほうしやうはその身のによはう
なるにまかせて京わらんへのくち
すさみをまことゝおもひ御まへに
ての物かたりははゝかりおほくおほ
へたりそのうへこのつはものとも
大江山のきしんをうちもらしぬる
なとゝいはゝかつうはちしよくのいたり
なりよそにての聞えもむねん
なるへしとさん〳〵にあつこう申さ
れけれはほうしやうよしなき事を
かたり出しめんほくなけにて色を
そんしいかにそれかしもたしかに
しりたると申さはこそ人のかたれ
は聞つたへさしきのけうに申つ
れしよせん御身とこゝにてあら
そひ申ともまこといつはりはしり
かたしさほとにふしきにあるならは

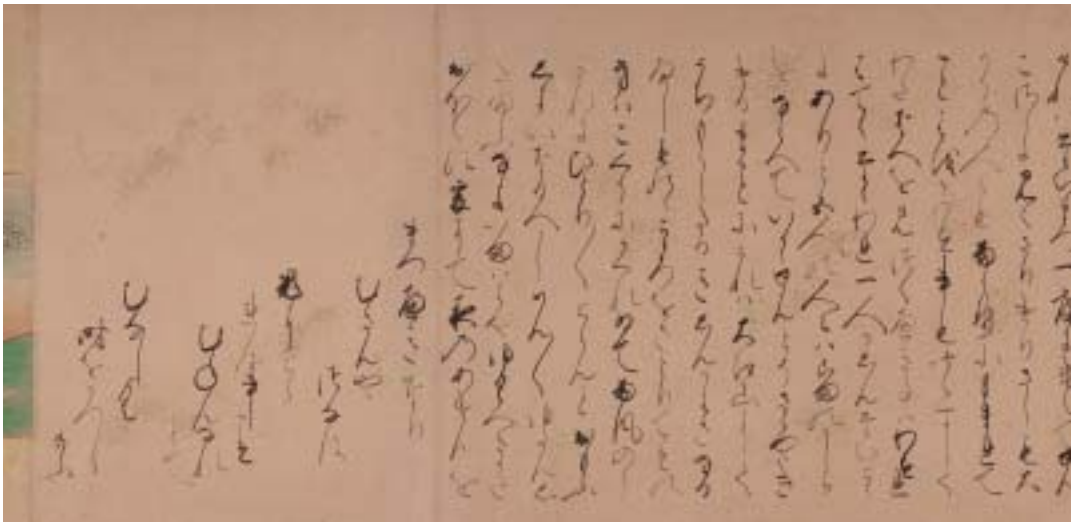
こよひにてもかのらしやうもんへ
ゆきあるかなきかを見たまへ見
たるこそせうこなれそれかしあし
き物かたりして御まへのけうをさ
まし申事御めんあれとてから
〳〵とわらはれけるつなこのよしを
きくよりあらこと〳〵しのほうしやう
のいひやうかなさてはそれかしから
しやうもんへえまいるましとおもひた
まへるかやたとひつくしのはて
なりともきしんあるとたにいふな
らは一人はせむかつてたいぢせん
に何のおそれかあるへきそやまし
てこれほとの事にこゝろをはみら
れしとさしきをたゝむと見え
けれは頼光きこしめしはらく
しつまり候へまことにきしんすむ
ならはつゐにはかくれあるましき
とおほせけりそのときめん〳〵
とうしんしてこゝろしつかにたい
ちせんあはてゝみゆるつはものと
とゝめたまへともつなもとより心はや
きおのこにていや〳〵ほうしやうに
たいしいこんはなけれともひとつ
は君の御ため又はてんかのあさけ
りなりとてひそかに一人しのひ
ゆきまことといつはりを見てかへらん
と申されけるもしきしんすんて
それかしにわたりあひて手にあま
るほとならはかさねてせんしをた
いして御むかひあるへきなり
おなしくはしるしの札を給はり
てまいりたるせうこにらしやう門
にたてをくへきとおもひきつ
たるありさまなりらいくわうちか
らおよはせたまはすそのきなら
はしるしのふたをゑさすへし
あいかまへてふかくしたまふなよそ
なからもんのありさまを見てかへ
れとそのたまひけるつなはしるし
の札をたまはりさしきをたち
て人〳〵におにのすむならはや
かてくひとりてさかなにまいら
せんもしうちもらしなは二た
ひかた〳〵に
おもてをむくへき
事あらしと
いひすてゝ
いそき
しゆくしよに
かへり
けり



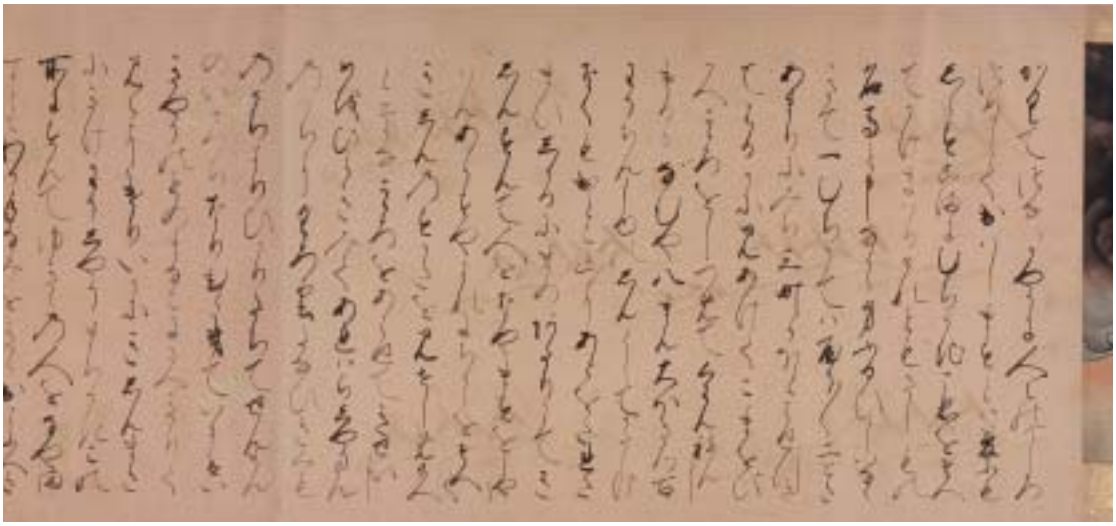
ひとまところにさつといり十文字
うつたるからうとのふたをあけひお
としのよろひにおなしけの五ま
いかふとのをゝしめ頼光よりあつけ
下されたるひさまるといふたちを
もちたゝ一人ひさうせしれんせん
あしけの馬にきんふくりんのくら
をゝきゆらりとうちのり一むちあ
てゝみれはこのころかひにかふたる馬
なれはむちにおとろきひろき大に
はにをとりいてしりこみしてそ
はねまはりけるらうとうともめを
さましこれは夜うちのいりたるらん
とてたちなきなたのさやはつし
なに事やらんとひしめきけり
つなこゝゑになりいひけるはあは
てたるものともかなたちもかた
なもさやにおさめよ我たゝいま
御まへにてふしきのさうろんし
てとうじの羅しやうもんへゆき
おにのすかたをみるへきなり人
あまたにてかなふましみな〳〵
これにまちはんへれとてこま
のたつなをかいくつておもて
をさして出にけりらうとう共
これをきゝさてもゆゝしき
御大事かなたとへははんくわい
ちやうりやうほとのつはもの千き
万きこもるとも人ならはおそれ

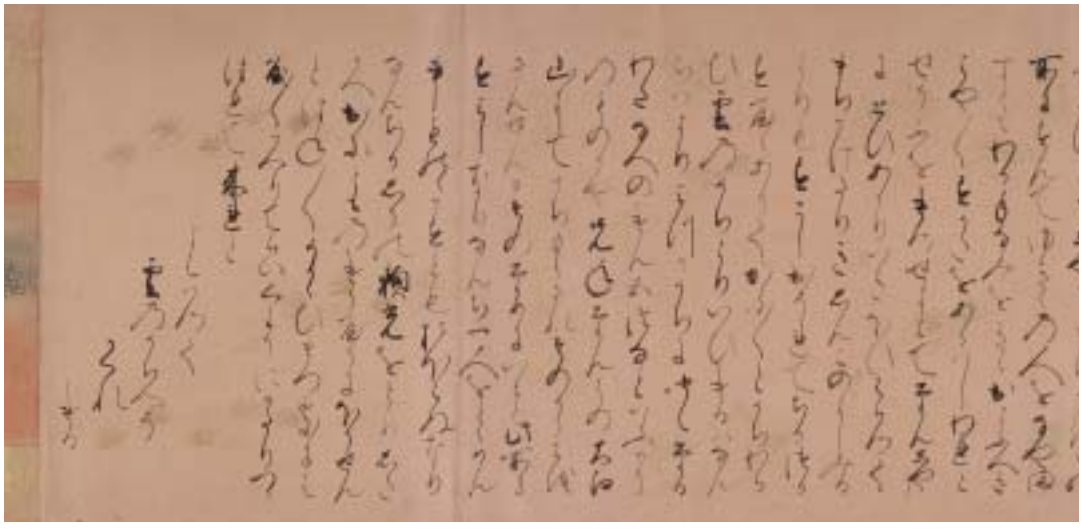
たまはしきしんはつうりきし
さいのものなれはいかにもわかみ
をへんしてうたるましこのた
ひの御せんとなれは御とも申へき
といひけれはつな此よしきゝ給ひ
よしなき人々のいひ事かな御ま
へのこうろんにをよひ身のたと
ひみちんにくたかるゝともいたむへ
きにあらす人あまたくしてゆく
ならはのちのあさけりもむねん
なるへしそのうへ今度大江山の
きしんをみるにちゑあそうして
たはかりやすしせんきまんき
ありとてもたちのかねのうたれ
むほとはきりとるへしわかいきほ
ひをしるならはいかなるきしん
なりともいつへきとはおほえす
ときうつりてはあしかりなんと
いひすてゝとねりもつれすたゝ
一人しゆくしよをいてゝ二てうお
ほみやをみなみかしらにあゆま
せゆくすてに九てうあたりま
てしつゝとゆきけるかにはかに
雨ふりくろくもおほひいまゝて
さやかなる月もかきくもりしんや
ことしゆくへきさきもしらすかへる
へきみちもわすれて
せんこも更に
みえさり
けり





されともてんかふさうのかうのもの
なりけれはいかてかみさるへといかつ
ちのひゝきをしるへにていなひかり
をたいまつとしてこゝろしつかに
そうちよせけるさるほとに頼光
はのこる人〳〵としゆえんして
まち給ふかいかさまこの雨のふり
やう又いかつちのひゞきわたるは
つなからしやうもんへゆきてきしん
になやまされぬるとおほえたり
此ありさまをしりなからこゝに
てまたんもこゝろもなしいさや
わたなへにちからをそへてとらせん
とてさしきをたち給へはもつとも
しかるへき御ちやうとてめん〳〵
しゆくしよへかへりおもひ〳〵の
よろひきてよりみつとのをさき
にたてこまにむちをうちそへて
手に〳〵大たいまつともしてみち〳〵
ときのこゑをつくりこれも大み
やをくたり八てうのほうもんまて
ゆき給ふ處にはかになまくさ
き風ふきて雨しやちくのことくふり
けれはたいまつ一度にきえてぜん
こさらに見えさりけりさしも大
かうの人々も雨かせにもまれて
ことはをかはす事も聞えすして
わたなへを見つくへき事はわすれ
はてゝたゝわれ一人かしんたいこゝ
にありと五人の人々はこまのかしら
をならへていかゝせんとそさゝやき
けるまことにこれは大江山にて
うちもらしたるきしんかわさなる
へしものゝこゝろをさとりてその
身はこくうにかくれゐて雨風のま
きれにひとり〳〵とらんとおもふ
しよいなるへしめん〳〵ゆたんし
たまふなよいまははやゆくへきかた
おほえす家にて夜のあけんを
まつへきなり
むさんや
つなは
鬼にとら
れん事こそ
むねんなれ
とて
むなしく
時をうつし
給ふ

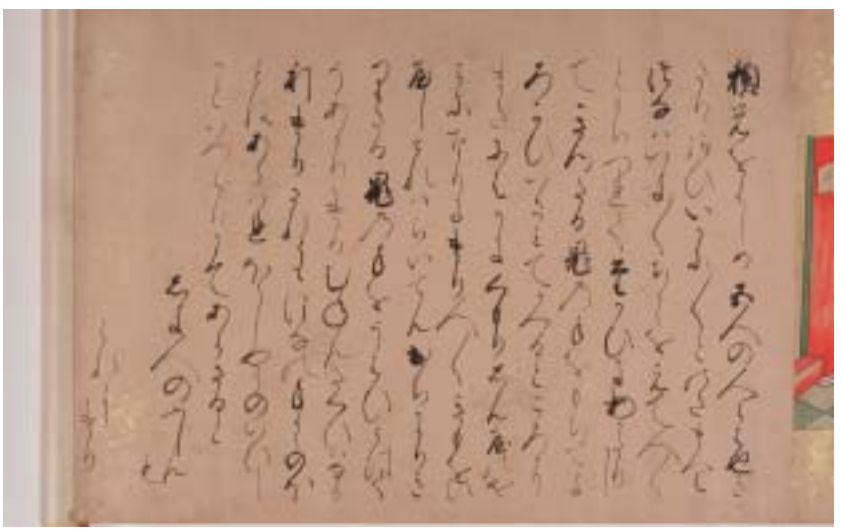




かくてつなはかやうに人々のうしろ
つめしておはしますとは夢にも
しらすこまにむちうちこゑをそへ
てかけまはりけれともさしもの
名馬と申なから身ふるひしいなゝ
きて一むちうてはやう〳〵二とき
あまりにみち三町かほとはせつき
てはるかに見あけてこまをひ
かへこゝろをしつめてくわんねんし
けるかなむや八まん大ほさつ百
わうちんしゆのしんとしてかたしけ
なくもおとこ山にあとをたれた
まひしかるにまのあたりにてき
しんすんて人をなやますをしやう
らんあらすやわれにちからをそへて
きしんのすかたを見せしめ給へ
とたなこゝろをあはせてきせいし
めをひらきみてあれはらしやうもん
のうちにくろ雲たなひきくも
のうちよりひかりたちてせんまん
のいかつちなりひゝきていまはい
きやうのものまなこにさへきりて
見えにけりいかにきしんまさ
にきけわうしやうまちかきこの
所にすんてゆきゝの人をなやま
すともわか手なみをきゝおよふへき
はや〳〵すかたをあらはしわれと
せうふをけつせよとてたんしやう
にとひあかりいきほひはらつて
まちかけたりきしんこのよしみる
よりもすこしおそれてちかつか
すやゝありてから〳〵とうちわら
ひ雲のうちよりいひけるはなん
ちはよりみつかうちに聞えたる
わたなへのけん五つなというかう
のものかや先年たんはの大江
山にてうちもらされそのうらみを
さんせんかそのためにいま此所に
すみしなりなんち一人をとゝめん
事ものゝかすともおほえぬなり
なんちかしうの頼光をとりした
かへおにとものけうやうにほうせん
とつね〳〵うかゝひまつ處には
や〳〵かへりてらいくわうにかたりつゝ
つれて來れと
よははつて
雲のうちへそ
かくれ
ける

つな此よしきゝて一人たにもとゝ
めえぬ身にてなにほとの事の有
へきそ我なんちかすかたみんため
に人々とさうろんしてこの所に
來りたりのちのせうこにはなんちた
ちてくれよいとま申てかへるとて
らしやうもんにうちより石たんに
しるしの札をたてをきまたこそ
けんさんにいるへしとて馬のはな
をひきむけてむちにあふみをあ
はせはやかへらんとしたりけるう
しろよりらしやうもんくつれかゝる
とおもひけれはそのたけ二ちやう
はかりなるきしんなかき手を
さしのへてひたりの手にてつ
なかかふとのてへんをつかみみき
の手にて馬のおをくる〳〵とま
とひてなんちいつくへかへるそしは
らくといふまゝにとつてなけん
としけれとももとよりつなは大ち
からのかうのものなれはすこしもさ
はかすこゝろへたりとてひさまる
をするりとぬきふりあけきしん
をきらんとしけれとも大はんしや
くにおさるゝことくにてはたらく
へきやうもなかりけりむさんや
つなはこゝろはたけしと申せとも
みかたのつはものもなかりけれは
すてにきしんにひつたてられ馬

もろともにとりひしかれいまは
さいことおもひけるかつなしあん
してかふとのしのひのをゝきつて
はなちもちたる太刀にて馬の
をゝきつてすてけれはきしん
おのれかちからにひかれて大ほく
をたをすことくにあをのけに
とうとたふれけりおきあからんと
しける所をつなとんてかゝりおさ
へてくひをかゝむとしけれはものゝ
かすともせすしてつなかうへを
つかんてらしやうもんのなかはま
てあかりけるをさけられなから
はらひきりにそきつたりける
きしんかみきの手をひちのかゝり
よりふつつときりおとしけれはら
しやうもんの二かいよりつなはまつ
さかさまにそおちにける石たん
にてかうへをつきそんしめくれ
こゝろもきえけれともしはしいき
をつきけれは人こゝちつき四はう
を見まはしけれは夜はほの〳〵
とあけにけりつなはむまにはな
れてかちたちにて
ほうせん
としてこそ
ゐたり
ける



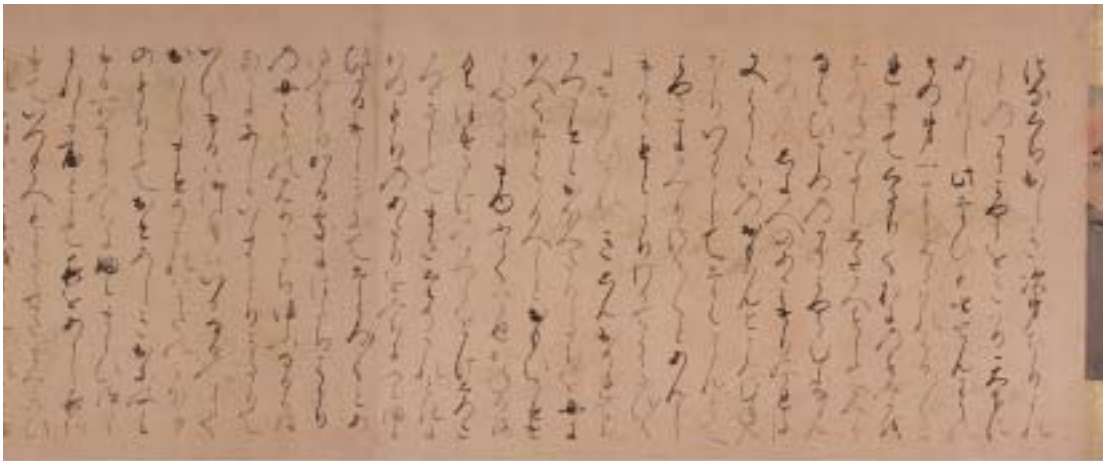
頼光をはしめ五人の人々はせき
たり給ひいかに〳〵とのたまへは
つなはいよ〳〵ちからをえて人〳〵
とうちつれてたかひに物かたりし
てきつたる鬼の手をもちてよ
ろこひいさみてかへるところに
またにはかにくもりしんやのや
みになりにけり人〳〵きもをひ
やしけれはらいてんおちかゝりき
りたる鬼の手をうはひとって
そあかりけるむねんたくひはなか
りけりされともつなの手からのほ
とはあらはれほうしやうのいひし
こといつはりにてあらさると
しよ人のふしんも
はれに
けり

【羅城門址を示す標石】
―明治28年3月建―

羅生門　下巻

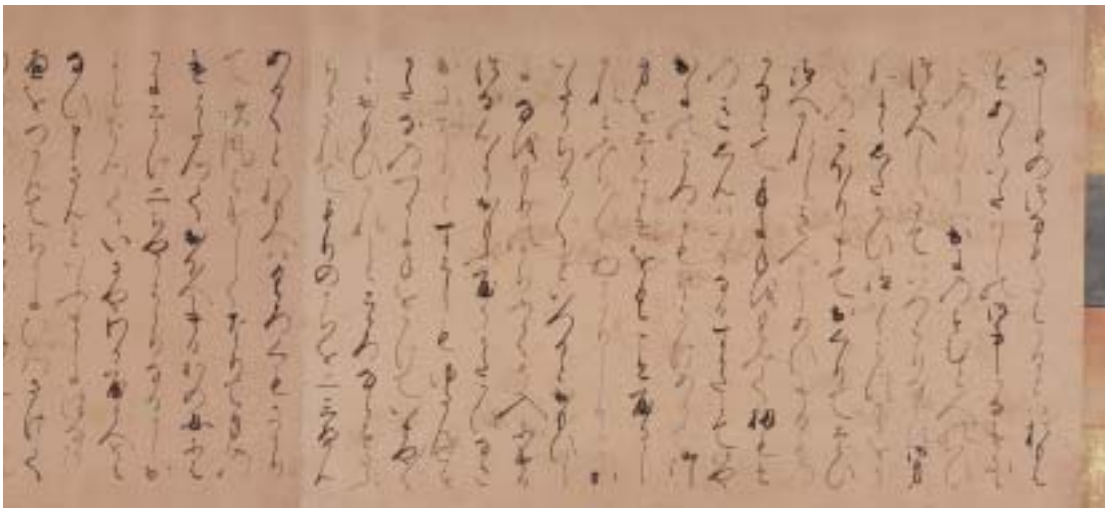
詞書釈文

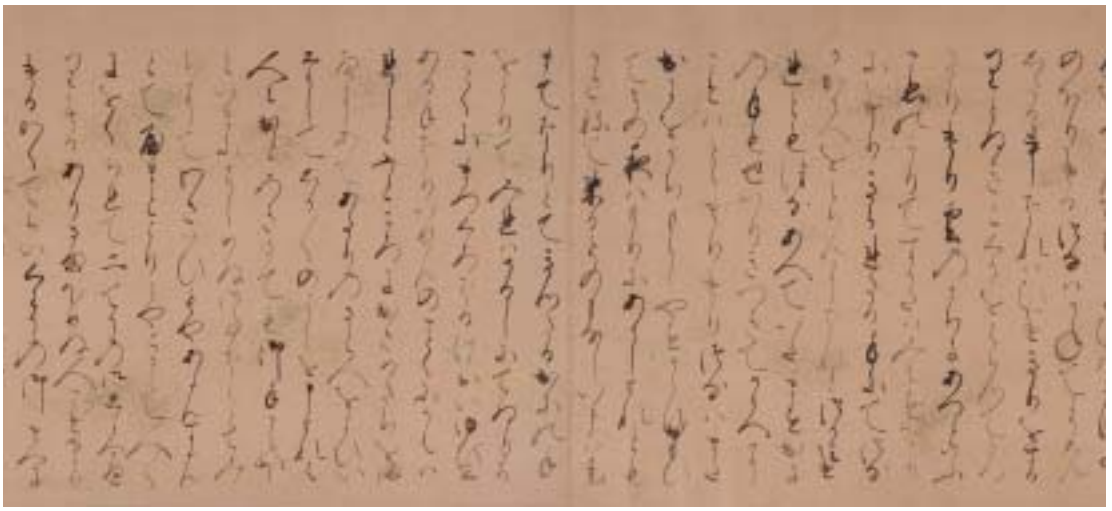
つなはきしんをうちもらしぬる事
をむねんにおもひ其後よな〳〵
らしやうもんへゆきてうかゝひけれ
ともあへてまなこにさへぎるもの
もなしゆきゝのみちもたやすく
なりてきしんははやほろひに
けりとてはんみんあんとのおも
ひをなしにけりそれよりもひさ
丸といふ太刀名をあらためておに
きりまるとそなつけけりおなし
き年の夏のころらいくわうきや
へいにをかされてしん〳〵とこし
なへにならんとしたまひけり醫師
くすりをあたへけんしやかちすれ
ともさらにそのしるしもなしとき
〳〵ものくるはしき事のみのた
まひけるこれはたゝことにあらし爰
かしこにてしたかへしきしんのお
むりやうともいま頼光の御身に
せまり給ふかやいかさま大事成へし
と人々おそれあひける處にあるも
の来りて申けるはやまとのくに
うたのこほりに大きなるもり有
このもりにきしんすんて人を
なやましうし馬をとりくらひ
けると申なりこれたにしたかへ給
はゝおにのけんそくたえてあくり
やうもしりそきはんへらんと申けれは
頼光きこしめし扨はよな〳〵廿
日あまりやはんにおとろかしける
よとむねんにおほしめしつなを
めしておほせけるはなんちやまと
の國にゆきてきしんをしたかへて
わかなふらんをやすめ候へとのたま
へはうけ給はり候とていとこゝろ
やすくりやうちやう申けるらいくはう
うれしくおほしめし家のたから
なれともなんちにあつけはんへる
とてひけきりといふ御太刀を
そ給はりけるとかや其後つなし
ゆくしよにかへりて夜にまきれ
かのもりにゆきこゝかしこを尋
けれとも人のしゝむらはつこつみ
ち〳〵て有けれともきしんのすか
たはみえさりけり木かけにた
ちかくれ物をすましてきゝけれは
うしのいきさしのことくにうめ
きけるこゑまちかく聞えけれとも
つなかあたりにもちかつかすまし
てなやますものもなかりけり
さるほとにつなはかのもりに三日
三夜まちけれともなにのしるしも
なかり
けり



つなくちおしき次第なりわれ
どゝのかうみやうをきはめ天下に
あらはし此たひも四てんわうの
その第一にえらはれはる〳〵こ
れまてくたりておにのすみかを
たつねいたしたかへすしてかへり
なはひころのかうみやうむにならん
そのうへしよ人のあさけりのかれかたし
又はうはいのおもはんところむねん
なりいかゝしてたはからんとて
みやこにかへりつく〳〵とあんし
けるかもとよりわかてからたひ〳〵
におよひけれはきしんおそれてち
かつかすとおほへたりかたちを女に
かへてたはかるへしとおもひうすけ
しやうにまゆふとくはかせかねくろ
くつけたけのかつらをかけしろき
かつきしてまたたそかれときに
かのもりのあたりをみちにふみまよ
ひたるけしきにてたとろ〳〵とあ
ゆみけりかゝる處にはたちはかり
の女はうの見めかたちゆふなるかは
るかにしかいたうよりきたりて
いひけるは御身はいかなる人にて
おはしますそこれはうだのこほり
のもりとておそろしきおにのすみ
ける所なりみちにふみまよひ給はゝ
われらかやとにて夜をあかし夜あ
けていつくへもわたらせたまへといひ

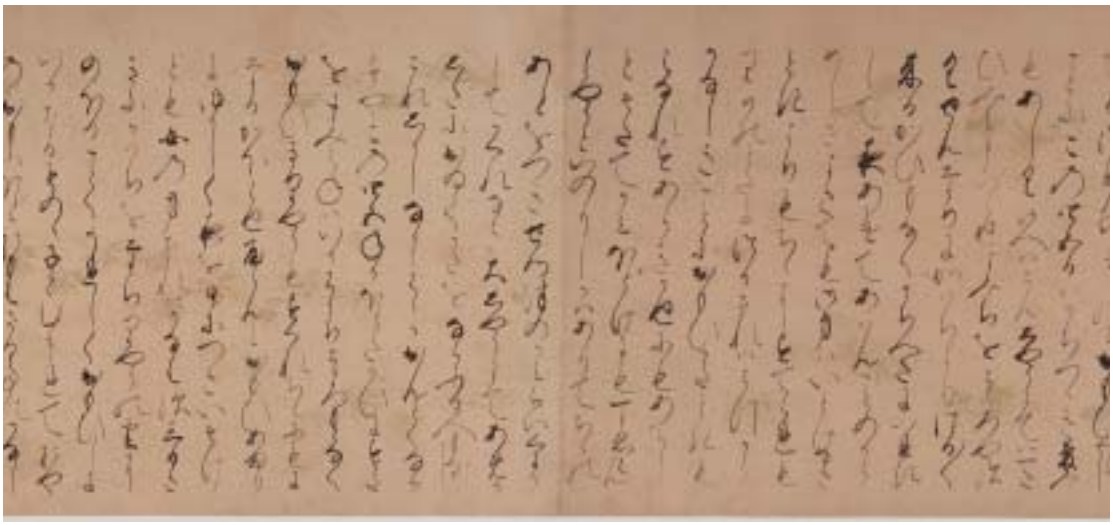
けれはつなはこれをきゝてこれこそま
ことのおにのへんけてわれをたは
かりけるよとおもひすてにかたな
のつかに手をかけてぬきうちにせん
とおもひしかいや〳〵もしまたさも
なきものをきるならはふかくの名を
とるへきとしあんして女はうのそ
はへよりうれしくもとひ給ふ物かな
我みよしのものにて候かうたのこほり
にしる人ありてたつねまいり候ひ
けるかみちにふみまよひて候かゝる
おそろしき所にきたりて候さても
御身はこゝもとにてはみなれぬ御す
かたありさまにてありいつくいか
なる人にてまし〳〵けるとこと
はをやはらけてとひけれはいまは
なにをかつゝむへきさきに一てう
もとりはしを夜ふけてとをりけ
れうつくしき上らうにゆきあ
ひいつくへゆくそとかたらひより
てみちすから物かたりしけるかお
ほきまちのはしつめにていさや
わかやとへつれてゆかんとてかき
いたくとおもひしにせつなのあひ
たにこのところへとひ来りみつから
見めかたちのうつくしきとてた
すけをきあさゆふおにゝめしつ
かはれうきめにあふことのかなしさ
よとてなみたをなかして
かたりけれは



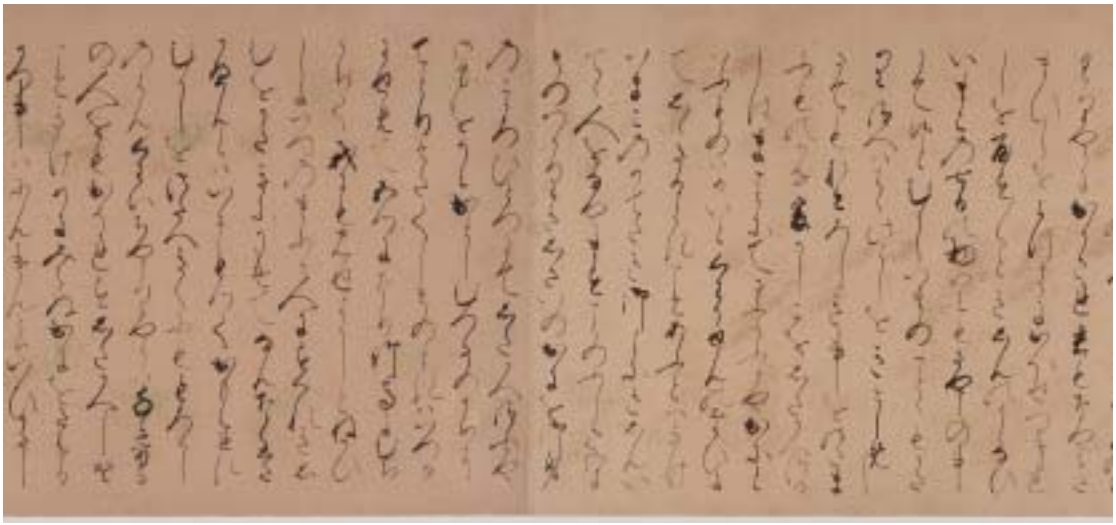


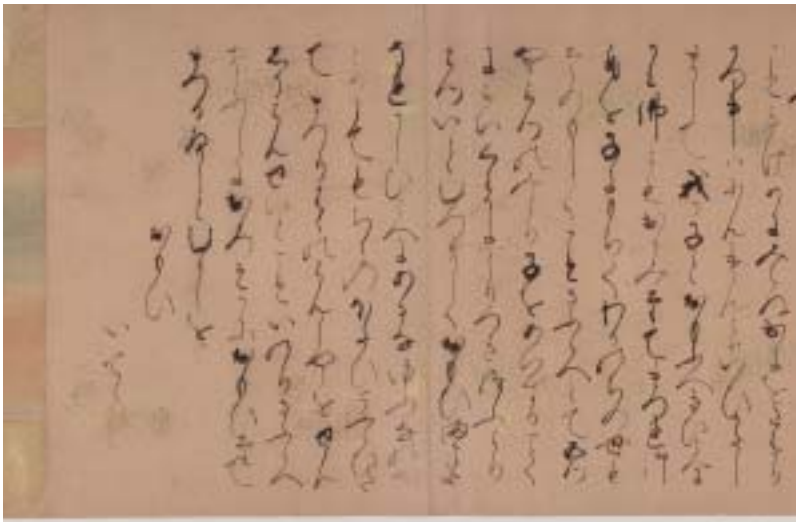
さしものつなもたはかるとはおもは
すあらいたはしの御事かなけにも
このもりにはおにのすむと人のいひ
つたへしはさてはいつはりならす御身
おにゝしたかひ給はゝみつからをう
たのこほりまておくりてたひ
給へうれしき人にあひけるもの
かなとて手に手をくみて扨もそ
のきしんはいかなるすかたにて候や
おにのこゝろにもなさけありて御
身をたすけをくこそやさし
けれとみち〳〵物かたりしけるかか
いたうちか〳〵といつるとおもひし
になをもりのうちふかくそ入にける
つな心におもふやううたかひなき
おになりとすこしもゆたんせす
かたなのつかに手をかけていまや〳〵
とおもひけれともこゝろならすたぶ
らかされてもりのうちを二三へん
あるくとおもへはくろくもさかり
て吹風はけしくなりて身の
けよたつておほへけるかの女には
かにたけ二ちやうはかりなるうしお
にとなつていさやわかやとへとも
なひ申さんといふまゝにつなかかう

へをつかんてちうにひつさけて
のほりけるつなはかねてよりしん
したる事なれはひけきりをする
りとぬきこくうをはらつてきつ
たりけり雲のうちにあつといふ
こゑのこりてすかたはみえすなり
にけりきられたる手にてつな
かかうへをみちんになれとつかみけ
れともつなあへていたますおに
の手もせいりきつきてかうへに
こそはとゝまりけりつなはまた
おにをうちもらしやすからすおもひ
てその夜はもりにあかしけれとも
かさねて来るものもなしいまは是
までなりとてきつたるおにの手
をとりてみれはうるしにてぬりたる
ことくにまつくろなるけおいゆび三
ある手なりいせんのことくにうはは
れしとふところにおさめたちをま
へにあてあたりのさと人をよひい
たしてしか〳〵のよしを申けれは
人々おとろきさても御手からのほ
といまにはしめぬ御事なりとてみ
ちにてわさはひもやあらんすらん
とてやまとよりみやこまて人〳〵
にをくられて二てうの御しよへかへ
りけるありさまほめぬ人こそなかり
けるかくてらいくわうの御まへに
まいりくたんのよしをくはしく申
あけおにの手を御めにかけたれは
らいくわうよろこひ給ふことかきり
なしさてこそやまひもなをりけ
りなをゆたんすへきにあらすとて
天むのはかせさつしよをひらきいち
〳〵申けるはおにの手を石のからう
とに入いぬゐのすみにくらをたて
これにおさめかさりして七日の間に
にんわうきやうをおこたらすよみた
まへは御てんのにはには十二人のと
のゐ人をおきて一ときつゝかはりて
十二人のはうにむかつてひきめを
しゆこしたまへとうらなひけれはは
かせのをしへのことくにもんこをとち
ふちやうのものゝ出入をかたくいみとの
ゐ人を十二人すへて
めん〳〵
ゐける弓の
をと
天地に
ひゝ
く
はかり
なり



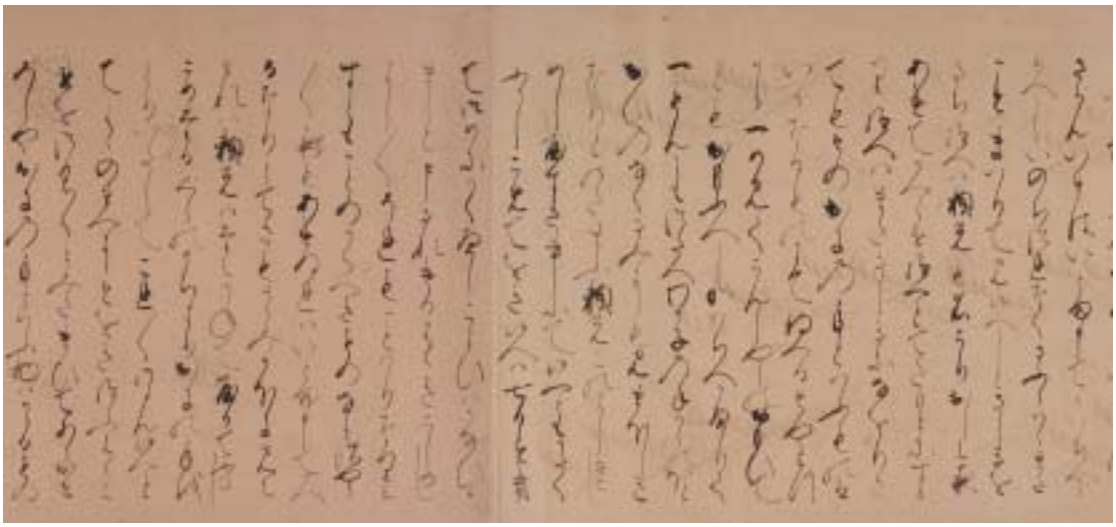
すてに六日になりにけりわたな
へのはゝ御せんかはちの國たかや
すのさとにおはしけるかしのひて
みやこにのほりつなのもんくわいに
たちより門ほと〳〵とたゝき
給ふいかなる人やらんとたつねさせ
けれはかはちよりはゝか参りたると
のたまふ此よしかくと申けれは頼
光きこしめし人してははゝあし
きさまにこゝろへ給ふこともありなん
とてみつからもんのきはまてたち
出てたま〳〵のおほしめしたち
て御のほりうれしく候へともこの
ほとさるしさい候ひて七日の物いみ
にて候かけふははや六日になり候
あすはかりにて候へはいかなること
もかなひ候ましこよひはいつくへ
も御こし候ひて御やすみ候へ夜あ
け候はゝけんさんにいり申へしと
ときこえけれははゝこのよしをきこし
めしさめ〳〵とうちなきてちから
およはぬ事ともなりさりなから
わとのは此ほとやまひにをかされ
てそんめいふぢやうときくなれは
おひの身のかなしさはねてもさめ
ても御身の事のみおもひくらし
ことにこの四五日はうちつゝき夢み
もあしく候へはこんしやうにては一た
ひみえまいらせよみちをこゝろやす
くせんためにかはちよりはる〳〵
来るかひもなくうちへたにいれす
して夜あけてあはんことのうら
めしさよさても御身はいとけなき
ときよりもちゝにすてられも
りめのとたにつかされはみつから
かなしきことにおもひかたときも
はなれすあらきかせにもあてし
とそたてかみほとけにもすゑはん
しやうといのりしかはありてちゝの
あとをつきせつつのかみらいくわう
とてかくれなき大しやうにてあめか
したにおゐてかたをならふる人もなし
これしかしなからはゝかおんとくなら
すやこの四五年かほとたかひにすかた
をまみえねはいかはかりこゝろもとなく
おもひきりやうもすくれちゝにもに
たるかほはせやらんとおもひあまり
にゆかしく夜を日につきいそけ
とも女の身なれはかなはす三日さ
きにかはちをたちりやうの雲に
のほることくうれしくおもひしに
いかなるものゝ子とむまれておや
のおもふほとおもはさる事のかなし
さよなかいきすれはこそいつしか
子にたにもうとまれてもんのほとり
にたゝすむいのちのほとのうらめし
さよとてふしまろひてなき給ふ
はや〳〵みつからをかいしてこのお
もひをはらしてたひ給へとこゑも
おしますさけひ給へは頼光此よし
きこしめしたうりなりことはり
とて門のひらきてけふまての物
いみをむなしくせんもいかゝとおも
ひあすとこそ申つれこなたへいらせ
給へとてうちふしておはします母
うへをかきいたきさしきへしやうし
たまひ
けり

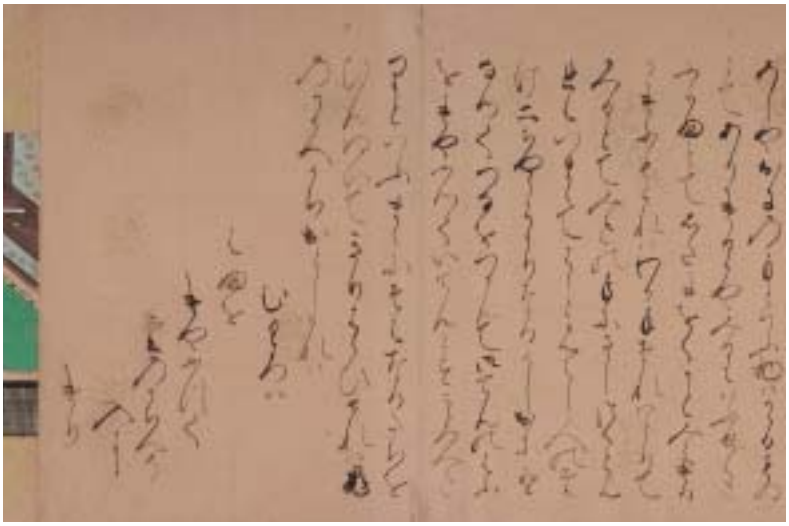




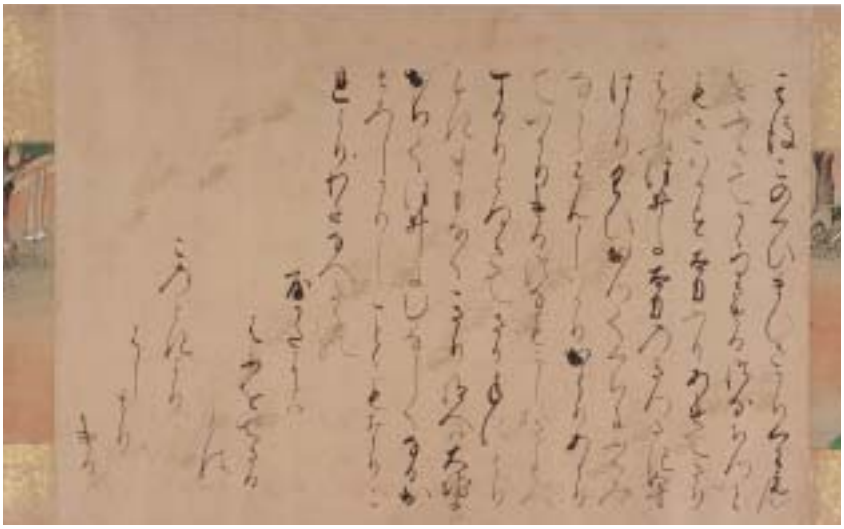
それよりもさけさかなをとゝのへて
はゝをなくさめ給ひけるはゝ頼光
のすかたをうへからしもへ見おろして
さてもきりやうこつからしんしやう
にひとしくなり給ふものかないまた
あけまきのすかたをのみおもひいて
くにのへたてゝすむ事もいかにはゝ
をこひしくおほすらんとおもふに
つけてものほりしに四五年みさる
そのうちにかやうにたくましく成
給ふかやなのらすはいかてかわか子と
おもふへき人々のうやまふもことはり
にて侍へるそや御身をみるよりも
ちゝのことをおもひいたされてそゝろ
になみたをもよほしけるとてたも
とをかほにをしあてゝさめ〳〵と
こそなかれける頼光もなみたをなかし
たまひたま〳〵あひみるはゝうへの
おひおとろへてみえ給へはなみたくみて
のたまふこそ御ことはりにてまします
この四五年のほとこゝかしこのうつてに
おほせつけられて御みやつかひの
いとまあらす候へはこゝろならすふかう
のものとまかりなり候そのうへす
きにし夏のころよりきしんのあ
くりやうにおかされ君もなやみた

まひしをみつからにおほせつけられ
しをやす〳〵ときしんのうしなひ
いまこの七日の物いみもさやうの事
にて候とむかしいまのことゝもかた
り給へははゝ此よしをきこしめし
さてもおそろしき事をのたま
ふものかな爰かしこをしたかへつる
とはまことにてさふらふかやおにと
いふものはめいとくわうせんのたひに
てしゝたるときこそあふとはきけ
いまこのめてたき御よにきしんい
てゝ人をなやますことのふしきさよ
そのつうりきしさいのおにを御身
のこゝろひとつにてしたかへ給ふかや
御身をうみおとしむつきのうちに
てとりそたてしそのときはいつか
にせめて五つになり竹馬にむち
うちて我にも見せよかしとねかひ
しにいつのまにか人にすくれきし
むをかたきにうけてなんなくした
かへんとはいまもつておもはれす
むかしをつたへきくにももろこし
のはんくわいちやうりやうは千き万き
の人をもおそれすしたかへしと
こそきけめにみえぬおにをたはかり
うつ事はにんけんとはいひかたし
まして我か子とおもふへきひとへに
かみ佛ともおかみたてまつれ御
身を子にもちてわかのちの世も
たのもしくこそさふらへとて五つ
やみつのみとり子をあいすることく
にらいくわうにとりつき給ふより
みついとゝむつましくおもひまことに
それかしひとへにあさなゆふなのつ
とめにてもちゝのほたひとふらひた
てまつりはゝのはんしやうをせん
しうはんせいとこそいのりさふらへ
なにしにおろそかにおもひたて
まつるへしとむかしを
おもひ
いてゝ

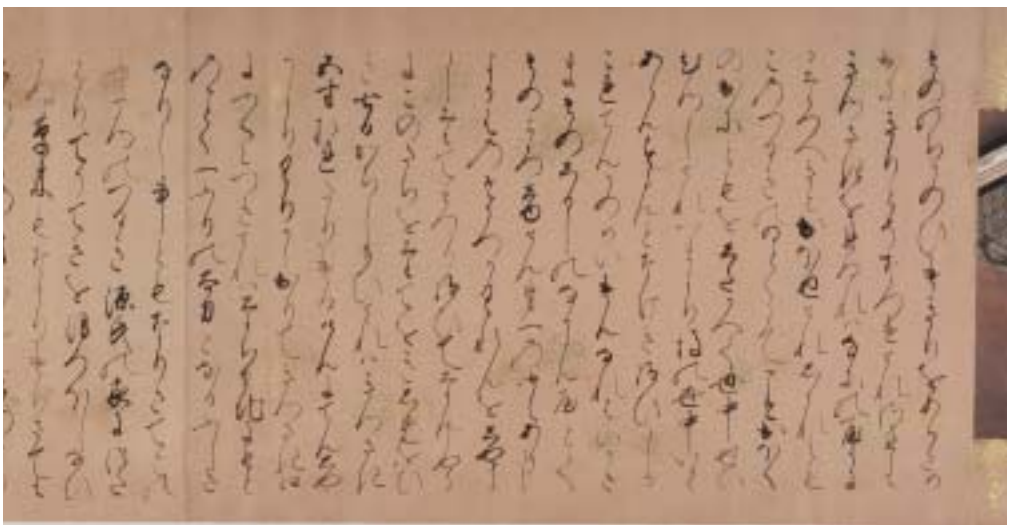




かのなり平の中しやうは御みやつかひ
のひまなかりしにはゝのこひしく
おほしめしなかをかといふ所より
しはすのつこもりかたにとみのこ
とゝて御ふみありなりひらなにこ
とやらんとおとろき給ふに哥有
おひぬれはさらぬ別れのありといへは
いよ〳〵見まくほしき恋かな
とあるをみてなり平かきりなく
かなしくうちなきてやかて御返
事にかくなん
世の中にさらぬ別れのなくもかな
ちよもといのる人の子のため
とよみけんもわか身のうへにおもひ
いてゝなみたのはしとなりぬるとて
なきしつみ給へはものゝふのめにも
なみたのありけるはふしきなれたゝ
おんあひのみちほとあはれなる事よ
もあらしとみなもろともになきに
けりやう〳〵夜もあけなんとす
はゝのたまふやう七日のものいみを
やふりわれにあひたまふこそうれし
けれしかしなからかう〳〵のこゝろなれ
はいかてかふつしんもゆるし給は
さらんいまはいとま申てかはちへ下
るへしいのちつれなくさふらはゝまた
こそまいりて見候へしとさしきを
たち給へは頼光も名こりおしみ夜
あけてかへらせ給へとてたもとにすか
り給へはまたさしきになをりさ
てもそのおにの手といふものは
いかなるものにて侍へるそやみつ
から一め見てこんしやうのおもひて
ともおもふへしかはちへかへりて
一もんにもつたへわか子の手からのほと
おひのなくさみにも見まほしき
なりとのたまふ頼光このよしきこし
めしやすき事にて候へともかたく
ふうしこめてをき候へは七日すき
て御めにかくへしこよひはかなひ候
ましと申されけるはゝきこしめし
よし〳〵それもことはりなりみ
すともことのかくへきものならすやう
〳〵夜もあけぬれはいとま申てかへ
るなりとてさもうらみかほに見え
けれは頼光はたえかねてやかてふうじ
こめたるくらのうちよりおにの手を
とりいたしてこれ〳〵御らん候へと
てはゝのまへにそをき給ふはゝこ
れをつく〳〵とみたまひてあらおそ
ろしやおにの手といふ物はかゝるもの
にてありけるかやみるもいふせくさ
ふらふとてしたにをくかとみえける
かけにもこれはわか手なれはとりて
かへるとてみきの手にさしつくと見
れはいまゝてはゝと見えし人のた
け二ちやうはかりなるうしおにと
なつてつなをつかんて御てんのはふ
をけやふつていてんとすこゝろへた
りといふまゝにそはなるたちを
ひんぬいてきりはらひけれは鬼
のかうへうちおとしけれは
むくろは
はふを
けやふつて
雲のうちへそ
入に
けり



其後このくひまひさかりくわえん
をふきてかゝりけるつなちつと
もさはかす太刀ふりあけてきり
はらふつゐに太刀のきつさき五寸
はかりくひおつてくちにふくみ
なからはんしはかりおとりあかり
ていかりけるつなもこしのさしそへ
するりとぬきてさか手にとり
すきまもなくきり給へは大地に
おちてつゐにむなしくなるお
そろしかりしことゝもなりこ
れよりわたなへたうの
やかたには
はふをせさる
とは
このときより
はし
まり
ける



そののちかのひけきりをあらため
おにきりとそなつけけれされとも
きつさきをれぬれはなにのやうに
かたつへきとおほせけれしかれとも
このつるきのゐとくにてこそおほく
のおにともをしたかへて世中せい
ひつしけれいまより後の世中いかゝ
あらんすらんとなけき給ひしか
これてんかのめいけんなれはいかさ
まそのしるしのなからんやとて
そのころしゆけん第一の聞えありし
よかはのそうつかくれんをしやう
したてまつり給ひてたんしやう
にこのたちをたてをきしめをひ
き七日かちし給ひけれはきつさき
五寸おれたりけるけんにてんしや
うよりくりからおりてきつさき口
にふくみつきけれはたちまちにもと
のことく一ふりの太刀となるふしき
なりし事ともなりさてこの
ふたつのつるき源氏の家につた
はりてうてきをほろほしなひ
かぬ草木もなかりけりさても
くに〳〵のきしんもしつまり
人のゆきゝのかよひしてとし
〳〵のみつきものもはこふにそ
のわつらひもなくこくとはんみん
よろこひめてたかりし御世とかや
これしかしなから頼光のふりや
くのほとそのうへ四人の人々ほう
しやうたくひなきつはものつき
そひたまひたるゆへとかやらい
くわうをはしめとして残り五人
の人々もおもひ〳〵にちぎやうし
てふつきとさかへ給ひ
けり

ISSN 0388-6700

JOSHO

BUKKYO UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

佛教大学図書館

＜後記＞

◆当館は平成16年10月に学術情報システムを主たる担当業務とする飯野勝則専門員を迎えました。
◆今号こそは年度末ではなく、秋ごろの発行を目指していましたが、ついに今日に至ってしまいました。

常 照 ― 佛教大学図書館報　第53号

平成17年3月1日　発行

編集・発行　佛教大学図書館

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL 075(491)2141
FAX 075(493)9042

http://www.bukkyo-u.ac.jp/lib/